

付属資料3 講演1 (Judie Kay 氏) (テープ起こし)

(司会) それでは、時間ですので講演1に入ります。講演はコーディネーターをそれぞれ設定しています。講演1に関しては、NPO 法人 WIL 代表理事、WACE 常任理事をなさっている宮川敬子様にバトンタッチしたいと思います。

講演1「北米のコーオプ教育と豪州・職業統合的学習」

Judie Kay (豪 Victoria 大学 学習・キャリア開発部門 所長)

コーディネーター 宮川 敬子 (NPO 法人 WIL 代表理事)

(宮川) 皆さんおはようございます。私は学者ではなく一般人なので、皆さまのような研究者ではないという立場です。何か失礼な発言があったり、適切でない言葉遣いがあったりするかもしれませんが、どうぞご容赦ください。今日の私の役割は、オーストラリアから招聘された Judie Kay さんのご紹介と、最初の基調講演のコーディネーターです。

それでは、Judie Kay さんについてご紹介したいと思います。配付資料に詳しく書いてあると思いますが、Judie Kay さんは、現在オーストラリアのメルボルンにあるビクトリア大学の Learning, Work and Career Development のディレクターでいらっしゃいます。6 学部5万人の学生を対象として、キャリア教育や Work Integrated Learning の統括として、そのポリシーメイキング、ガイドライン、IT システム構築、スタッフ育成、国際インターンシップのエクステンジや学生のキャリアディベロップメントの戦略の構築、そして全体の運営管理をなさっています。年間の予算としては約3億円を管理して運営していらっしゃいます。現在はビクトリア大学でこのような職務に就いていらっしゃいますが、その前はオーストラリアの中でも産学連携教育の先導的な大学と言えるメルボルンのスウィンバーン工科大学で、主に企業との戦略構築や関係構築などの分野を中心に、責任を持ってやっておられました。ご多分に漏れず、この分野で管理者に上がっていく人たちは、最初はいろいろな学位からスタートします。必ずしも教育学からスタートする人ばかりではなくて、いろいろうな方がこの分野に入ってきています。Judie Kay さんも最初は、メルボルン大学の BA からスタートして、現在に至るまでいろいろうな分野の勉強をしていらっしゃいます。例えば教育学やエデュケーショナルカウンセリング、イノベーションやアントレプレナーシップのディプロマを取得なさっています。現在はビクトリア大学で教育学のマス

ターのコースに入っていらっしゃいます。2012年にはそのディグリーをお取りになるのではないかと思います。

Judie Kayさんと私の出会いは2002年のWACE (World Association of Cooperative Education)です。これは、世界各国にWork Integrated Learningの推進組織があるのですが、そういう各国のプラクティショナー、リサーチャー、学長レベルまで含めて、学会的な活動をしているところです。そのWACEのロッテルダムでのカンファレンスに私が参加者として行っておりまして、そこで初めて会いました。10年ぐらい前です。お互いにもっと若かったのですが、それ以来ずっと親交を深めています。そこに行くと1週間ぐらいはみんなと交流するので、そこで楽しい時を過ごし、またいろいろな国でどうなっているかという話をしていました。

今回、文部科学省の事業の一環としてのシンポジウムにお呼びする人は、オーストラリアからだったら誰がいいだろうかというご相談がありました。もちろん大学の学長さんなどもいろいろいらっしゃいますし、リサーチャーもいらっしゃいますが、私は今日のテーマとして、日本の中でインターンシップからWork Integrated Learningを発展させていこうと考えた場合、現場で責任を持って実行している人、そしてリーダーシップがあり、行動力があり、しかも人間力があり、外側にあるいろいろな情報を入れて、どんどん自分も進化している。そして、その力を大学の中で発揮している人。さらに、各国の人たちとのネットワークをどんどん広げている人として、ぜひ皆さまにJudie Kayさんとのネットワークづくりをしていただきたいということもあって、来ていただきました。

現在、Judie Kayさんは、オーストラリアのWork Integrated Learningの推進組織であるACEN (Australian Collaborative Education Network)の会長をなさっています。また、その設立にも関与されています。紹介が少し長くなりましたが、早速Judie Kayさんに今日の講演を始めていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(Kay) 素晴らしいご紹介をいただきましてありがとうございます。吉本先生にお招きいただき、本当にうれしく思っています。日本に来たのは今回が初めてだからこそ、ここに来てうれしく思います。また、ACEN、それからオーストラリアのWIL (産学連携教育)を代表してお話しできることを大変うれしく思います。日本というと、大地震、津波が起こって1年が経過しました。この悲劇に私たちは大きな関心を寄せておりました。いかに大きな悲劇が日本で起こったのかということに対して私たちはそれを理解し、できる限りの

ことをしたいと思っています。

#2

こちらが私の話のアウトラインです。このような話をしたいと思っています。最初に、オーストラリアの状況から産学連携教育を眺めてみます。また、オーストラリアで WIL に対して課題があるとするならば、それは何なのか。それから、オーストラリアとほかの国の WIL の比較をしたいと思います。特に、北米との比較をしたいと思っています。もちろん私の観点も踏まえながらお話をしたいと思います。

また、近年の調査結果についてもお話しします。Janice Orrell 先生が行った調査で、その中には成功の秘訣が何かということが同定されています。そして、オーストラリアのメルボルンにある私の大学であるビクトリア大学が、いかにうまくやってきたか例を挙げながらお話しして、最後にまとめたいと思います。その後、ぜひたくさん質問をいただいて、それに喜んでお答えしたいと思います。

#3

オーストラリアはこのようなところです。さて、オーストラリアのコンテキストですが、オーストラリアの経済は非常に強力です。そして、われわれは非常にラッキーだと思っています。これは鉱山の産業とかかわっており、現在もマイニングインダストリーがブームです。それから、いろいろな能力のある人についての競合が分野によって非常に激しくなっています。そして、雇用主は強い専門的能力を持った卒業生を求めています。また、産学連携教育は広がっています。つまり、産業に関連したプログラムを大学で行い、それによって卒業生がエンプロイアビリティのスキルを身に付けることができるようにと考えられています。

#4

ということで、オーストラリアでは Work Integrated Learning が行われていますが、Patrick やそのほかの仲間がレポートを実施しています。これがナショナルスコーピングスタディと呼ばれるもので、つまり産学連携教育というのは包括的用語で、理論と実践を統合する戦略やアプローチであり、その中で意図的にカリキュラムを設計するというものです。スコーピングレポートによると、WIL にはさまざまなものがあります。有償、無償、

単位取得できるかできないか、そして必須か選択かに分かれています。

#5

次に、WIL についての定義です。これは一つではなく、いろいろな定義があります。ここでどのような用語がよく使われているかをご紹介します。実習科目、専門的实践、コアオブ教育、プロジェクトベースラーニング、また業界ベースラーニング、インターンシップ、フィールドワークなどですが、ほかにもさまざまな言葉があります。この写真はビクトリア大学の看護学部などの学生（パラメディカル）が、アフリカでインターンシップを行っているところです。

#6

私が、オーストラリアで WIL が何かということでまとめたものです。この WIL (Work Integrated Learning) はオーストラリアで非常に大きく成長しています。そして、吉本先生がおっしゃいましたが、従来の領域である工学、看護学といったものからさまざまな領域に広がっています。また、手法もいろいろ異なっており、それぞれの大学が異なったアプローチをとっています。そして、カリキュラムに統合するということがわれわれオーストラリアにとって非常に重要なことです。また、ガイドラインにはきっちりとしたルールがなければいけません。つまり、何がどのようなものに対して資金提供するかというものです。学習に関しては、ただ単に卒業するだけではなく、このコースで学ぶことにきっちりと専念していただきます。すべての大学ではありませんが、ほとんどの大学が戦略的なミッションを持っており、私の大学もその一つです。それからピークアソシエーションと呼ばれる頂上団体、雇用団体もまた WIL に対して非常に大きな関心を持つようになっていきます。しかし、WIL はいろいろな課題に直面しています。これに関しては後ほどお話しします。

#7

これから 4~5 枚ほどスライドをお見せしながら、課題についてお話をしたいと思います。日本でもそうかもしれませんが、最初は価値のある、質の高い経験を提供しなければなりません。有用性がなければいけないし、質が高くなければいけないし、また、WIL を実践する際、学生に対して準備を提供しなければいけません。それが課題です。オーストラリ

アでは、クリエイティブ・アプローチがとられています。これによってチャンスを増やしていきます。つまり、シミュレーションした経験を提供します。また、キャンパスに基づいたもの（キャンパスベース）やバーチャル環境といったものでチャンスを増やしていかなければならないと思っています。

また、主催組織で監督をしていただくレベルも高くなければなりません。それから学生が準備できるように戦略を向上させる必要があります。場合によってはわれわれの大学もそうですが、フリンダース大学はオンラインモジュールを持っています。そうすることで大学が学生に準備を提供するのです。それから非常に大きなチャレンジは何かというと、実習というものに対して、信頼できて、関連していて、一貫性のあるアセスメントを行うことです。それから、リスクアセスメントやリスク管理にもきちんとフォーカスを当てながらやらなければいけないと思います。アフリカにいる学生には本当にたくさんのリスクがあります。そのリスクをどのように管理するかということも考えなければなりません。

#8

もう一つのチャレンジは、公平性とアクセスです。われわれはすべての学生にこうした学習の場を提供しており、すべての学生が WIL に参加しています。ですから、WIL に対するアクセスを保証することは非常に大事ですが、ある範囲の学生グループにはアクセスの不平等があります。オーストラリアには海外からの留学生がたくさんいらっしゃるし、障がいのある学生、あるいは社会経済的に事情のある学生、家族に対する責任のある成人の学生など、いろいろとバックグラウンドの違う学生がいて、アクセスしにくいという状況もあります。ですから、平等とアクセスをすべての学生に提供することが課題です。

また、国のエンゲージメントサーベイが行われましたが、WIL は非常に重要な戦略であって、すべての学生のグループのスキルを向上させると評価しています。これは非常に重要だと思います。それから、WIL に参加する際には経済的なものがあります。例えばいろいろな実習をしなければなりません。看護であれば、メルボルンではなくメルボルンから離れた地域に行って実習をしなければなりません。従って、宿を借りて実習をしなければなりません。また、アルバイトがあれば、それを辞めて実習に参加しなければなりません。このような経済的な側面について、私たちは解決しきっていません。

WIL に対して十分に準備をさせていかなければなりません。財政的な問題は一番大きなもので、なかなか完全に解決しきっていませんが、政府は政策を変えました。高等教育（大

学)に進学する学生を増やそうという政策です。ですから、このように高等教育(大学)に進学する学生が増えれば、WILに参加する学生も増えます。そこで、この増えた学生数にどのように対応していくかが大きなチャレンジとなっています。

#9

次のチャレンジは、すべての主なステークホルダーの期待に添うようにすること、期待を管理することです。ご存じのように、いろいろなステークホルダーと非常に複雑な関係を持っています。ですから、WILはこのような関係を管理していかなければなりません。そして、非常に多岐にわたる期待やモチベーションを管理していかなければならないということです。効果的で質の高いWILを提供するには、意味がある経験、モニタリング、導入、反省が必要です。また、私たちは現在メカニズムを開発中で、大学と企業、業界との対話を強化しようとしています。また、専門機関、雇用主、研究機関、高等教育機関などのいろいろな部門から、プレイスメントの数が少ないという懸念が出ています。ある学部、学問ではあまりにもプレイスメントの数が少ないということです。

また、幾つかの機関ベースによる専門的な開発をWILのスタッフに対しても提供していかなければなりません。つまり、WILのスタッフの専門的な育成が必要です。また、国のプロジェクトとして、WILのためにリーダーシップフレームワークを作ろうというものがあります。私はそのプロジェクトに二つかわっています。リーダーシップフレームワークがその一つです。高等教育のリーダーがWILをリードするための資質を向上させようというものです。

#10

別の課題としては、コミュニケーションと調整(coordination)を向上させます。大学とコミュニティ、そして業界間とのコミュニティの向上です。二つの大学が一つの同じ企業に行ってしまうなど、情報や調整が足りないことが多々あります。やはりこうした場でも調整が必要です。大学の中には、リレーションシップ・マネジメントシステムを提供しているところもあります。大学によってはスモールユニットを開発し、このようないろいろな関係をコーディネートする調整機能を持たせています。

それから、先ほど申し上げたナショナルWILポータルは、産業と大学とのいろいろなコミュニケーションを密接にするような活動を促進するために設立されました。オーストラ

リアの34の大学が一つのポータルに加わっており、これが2011年5月に設立されました。

#11

最後は大きな課題です。これは資源をどのように配分していくかということです。WILでは非常に複雑な運営上、学術的な要件が必要となってきます。これは最近の政府のレポートでもはっきりとしてきました。「ベースファンディングレポート」という報告書ですが、連邦政府は、WILは実践するには非常に資源集約的で、高等機関だけが単独でやるにはあまりにも資金が足りないと報告書で述べています。つまり、この報告書の要点は、WILをするということは、ただ単に通常の教育だけでは足りず、それに適したいろいろな機能が必要となってきます。残念ながら、資金調達、資金源というところではまだまだあまり大きく変わっていません。しかし、大学自体が独自に大学全体のシステム、例えばWILに対しての管理をする際のソフトウェアを開発するなど、独自の対策をとっています。

それから、この報告の中で述べられているのは、雇用主でも資源集約的だということです。政府に対していろいろな意見が提出されましたが、その中には今申し上げたことが書かれていました。高等教育機関は、いろいろな教職員がワークロードモデルという、労働量がどのぐらいなのかというモデルを作りました。大学の教職員のワークロードを測るという点でこのようなモデルが必要となり、これを管理していくことになりました。

#12

私はオーストラリアのWILについては、よく熟知しています。これが北米のモデルと比較するとどのような結果になるのかというと、もちろんほかの意見もあると思いますが、私としては北米のコーオペ教育はオーストラリアに比べると、伝統的なフォームだと言えます。コーオペ教育は北米では一つのモデルです。オーストラリアにはいろいろなWILのモデルがありますが、その一つと言えます。伝統的には就業の場に就く期間と、大学で勉強をする時間が交互に持たれます。そして、有償という形の英国のモデルがオーストラリアに近いと思います。

オーストラリアでの経験から申し上げますと、WILはカリキュラムの中にもっと統合されていて、ほとんどが単位(credit)を修得できます。しかし、北米ではそうではありません。北米ではより強い企業の支援があり、有償のプレイスメントを支援してくれます。コーオペラティブ教育に対する企業の強い協力ということです。しかし米国では、こうした

プレイスメントがカリキュラムの中にあまり深く統合されていないと言えます。しかしオーストラリアでは、無償のインターンシップは法律上、なかなか難しいのです。Fair Work Australia という法律があるのですが、この法律では企業における無償の仕事を許可していません。もちろんボランティアは法律上も可能ですが、実際に企業で働くということにおいては、無償の労働は許可されていません。

#13

このプレイスメント (WIL) はカリキュラムの中に含まれているので、学際的なクレディビリティがオーストラリアではきちんと保証されていると言えます。北米における多くの大学、例えばシンシナティ大学のような大手の大学では、コーオプ教育のプログラムはセントラルユニットによって運営されています。もちろんすべてではありませんが、多くがそうです。一方、オーストラリアではいろいろなファカルティ (学部、部門) によって運営されています。

私見ですが、オーストラリアの WIL は大学の戦略的なミッションに非常に密接に連携していると言えます。私たちは WIL をすべての学生に対して提供しています。その結果、多くの学生が関与しています。北米では、サービ斯拉ーニングに対する非常に強い伝統があります。これは学部、部門レベルで管理されていると思います。そして、学生の学習に結び付いています。しかし、サービ斯拉ーニングやコミュニティベースのラーニングは、現在オーストラリアでもより大きな広がりを見せつつあります。

#14

最近、Australian Learning and Teaching Council という評議会が Janice Orrell 教授に委託されました。グッド・プラクティス・レポートが発行されましたが、これは良い事例を集めてほしいというものです。このレポートには、28 の研究プロジェクトの結果が網羅されており、非常に興味深いものとなっています。どのような要素が WIL のプログラムの成功の要因となるのかということについて書かれています。

最初に、高等教育機関のレベルでの話をしています。WIL を成功させるには、明確に表現された、共通のビジョンを持たなければなりません。それは、どのような機関のシステムやインフラストラクチャーが WIL を認識しているのか、どのような資源が求められているか、そして大学と職場がお互いに補完し合いながら学習を支援していくことをはっきり

と認識しなければならないということです。また、現在の教育機関が行えるサービスを十分に利用する、つまりキャリアサービスなどを WIL のプロセスの中に統合していくということです。

#15

また、教育というレベルには適切な導入が必要で、学生に十分な準備をさせなければなりません。実際に実習に行かせる前には、こうした導入と準備が必要です。それから、組織だった、批評的に内政的で自己、あるいはピアラーニングのプロセスを WIL の経験の中に提供しなければならないということです。また、リスクのエLEMENTがあるということをしかりと認識することと、いろいろと開発し、試行錯誤し、技術ベースのツールをアップスケールできるようなことに投資していくということです。それによって、WIL の経験がより補完的に提供できます。

#16

それから、パートナーシップ（連携）は非常に重要です。ご存じのように、WIL のプログラムでもパートナーシップが非常に重要となってきます。現場の監督は、学生がこれまで大学で何を学んできたかということを熟知しなければなりません。また、WIL に関するコミュニケーションやイノベーション、ディベロップメントという点にすべてのステークホルダーが関与していかなければなりません。そして、提供される職場での監督者、あるいは大学での監督者に対して、十分な育成を行わなければなりません。つまり、リーダーシップの能力の育成機会を提供しなければならないということです。また、非常に成熟した強固な関係を、大学とそうしたプレイスメントの提供者との間で、相互利益に基づいて培っていかなければならないということです。

#17

また、グッド・プラクティスの基本は、学生は十分に準備をしてその職場での要求を満たし、十分な資源が利用できなければならないということです。それから、学生に対して安全性や効果的な学習経験を担保しなければなりません。すべての学生が同等のアクセスを得なければなりません。例えば先住民の学生も適切な支援が受けられなければならないし、身体に障がいのある学生に対しても、WIL プログラムを自分のコースの中で受けるこ

とができるように、アクセスをもたらさなければなりません。

#18

海外からの学生に対しては、オーストラリアの社会的、文化的な職場環境に対しての理解を深めるための支援を行わなければなりません。それから、WIL プログラムは専門的なレジストレーション、そして認証評価機関のリクワイアメントを満たさなければならないということです。こうした WIL は理論と実践の学習を統合させる重要な手段とならなければならない、モニターし、評価し、そして WIL のプログラムのアレンジメントのいろいろな効果を査定するよういろいろな資源を駆使し、エビデンスを収集しなければならないということです。

#19

次に、私のビクトリア大学のオーバービューを申し上げたいと思います。これが私の大学で、メルボルンに立地しています。私たちのビジョンはエクセレントで、いろいろなところに関与し、アクセシブルで、国際的に十分に認知されたリーダーシップとしての地位を築いています。そして学生たちが自分たちの能力を発揮し、それぞれの生活をいい方向に改良していくためにエンパワーメントしており、インダストリーやコミュニティに関与してより良い世界を作り上げています。ウエストメルボルンに 10 のキャンパスがあります。それから中国、マレーシア、インドでいろいろな活動を行っています。メルボルンだけではなく、オーストラリア全体で学生数を大変増やしています。西部はあまり恵まれていない地域です。ビクトリア大学の学生たちは文化の多様性をもたらしています。吉本先生も同意されると思います。5 万人の学生がいます。

#20

このチャートは文化の多様性を示しています。学生とスタッフの間に 90 もの国籍が見られます。ビクトリア大学は国連とも呼ばれると思います。たくさんの国籍の人がいます。

#21

4 年前にビクトリア大学は、ほかの大学とは違う多様性、多角化を求めました。ビクトリア大学の職場コミュニティにおける教育という名前で始めました。これはビクトリア大

学における WIL です。この職場コミュニティにおける教育をすべての学生のために持ちました。多くのオーストラリアの大学は WIL を提供していますが、ビクトリア大学のアプローチは、すべての学生のため、すべてのコースを対象とします。これはコースのアセスメントに基づきます。そして活動はものすごく柔軟性に富み、広範囲にわたります。プロジェクトも含まれ、シミュレーションした環境や主体的な研究、現場実習もあります。すべてのコースの最低 25% はアセスメントとして、職業コミュニティにおける教育に当てられなければなりません。これは明確に示されています。

#22

これはビクトリア大学から抜粋した職場コミュニティにおける教育です。ぜひこの方針を読んでいただきたいと思います。ビクトリア大学は、実践と理論上の知識を統合させた教育を、確実に学生に提供することに専念しています。そして、その学習活動は大変柔軟性に富み、ニーズを満たすものです。学生は十分に準備をし、就業後はきちんとブリーフィングを行います。ステークホルダーとの主体的なかわり合いを持っており、これは相互の利益によって強化されています。そして、アセスメントはきちんと計画され、状況を考慮し、関連付けた豊富な体験を提供します。

#23

目的は、現実的な状況の実践的知識を深めて、実践的な就業能力を付けさせ、就職、キャリア準備へと貢献をすることです。さまざまなモデルがあります。

#24

私どもは、職場コミュニティにおける教育に原則を持っています。これは今から開発をしていくものですが、すべては同じです。教育活動はすべての人たちに利益があり、カリキュラムにとって不可欠な部分であるように統合されています。アセスメントのタスクは期待される学習効果をきちんと実行したものであり、本物ということを強調します。また、評価クライテリアもきちんと定義されています。すべての関係者が学習活動に十分に準備ができており、学習者は職場やコミュニティにおいてサポートを受けます。活動の質は継続的な調査、改善を行うことで保証することが原則になっており、十分な資源を持っています。

#25

それでは、ビクトリア大学の短期的な現場実習をご紹介します。いろいろなことが経験できます。最初は短期の現場実習です。4 週間の実習で、これは短期と考えられています。Donna さんの例です。Donna さんはお母さんです。最初は、資格を持ったシェフでしたが、食品化学に大変興味を持って分析化学の学士課程に入学しました。そこで、Department of Primary Industries で4 週間の現場実習を行い、ある研究を実施しました。その研究結果がある会議のポスターで認められました。彼女はこうに言っています。「理論と実践を結び付けることができ、私は大きな自信を持った。自分にとって大変利益があった」と。そして、一生続けたいと思う仕事を見つけることができた、はっきりと自分向きを見つけたと彼女は述べています。

#26

長期的な現場実習は、賃金が支払われます。Kellie さんの例です。ビジネスの観光マネジメントの学士の卒業生です。カンガルーのスーツを着ている人と一緒に写っていますが、彼女はツーリズム・ビクトリアでオンラインマーケティングコーディネーターとして現場実習を行いました。観光ビジネスとのネットワークづくりや知識、そして観光産業への情熱が高まったということです。そして、彼女は現在の仕事を確保する上で、現場実習は重要な役割を果たしていると定義していました。

#27

たくさんのシミュレーションされた環境を持っています。5 万人の学生を抱えているので、実際に全部の学生を現場に送ることは不可能です。最初の例は獣医の看護師です。大学には獣医のクリニックがあります。これはシミュレーションされた環境と呼ばれています。2 番目に、デザインスタジオがキャンパスにあります。外のクライアントから仕事を取って、実際の実習を行います。

#28

これはコミュニティベースのプロジェクトです。毎年、連邦保健省の Roxon 大臣は、学生のためにプロジェクトを設定しています。2011 年は新しい禁煙キャンペーンづくりとい

う課題を提供してくれました。すべてのコースの学生が作業し、本物のクライアントに對するように、例えば納期の時間も守るといようなきちんとした形で、本物のタスクを持ちました。

#29

これは産業ベースのプロジェクトです。メルボルン前市長の John So が写真に写っていますが、学生がロゴのコンペに参加し、学生の作ったロゴを前市長が発表しています。

#30

これは大変興味深いと思いますが、大規模なプロジェクトを開始しました。メルボルンで行われるフェスティバルです。毎年、300 名ものすべての教科にわたる学生が、このプロジェクトに参加します。幼児教育の学生、ある特定のイベントマネジメントの生徒はイベントの準備をし、マーケティングなどを行います。また、ホスピタリティの学生も活躍します。すべての学科にわたる 300 人の学生が、20 のイベントにかかわっています。

#31

オーストラリアでは、WIL は理論と実践を教える促進触媒の形になっています。カリキュラムに統合させることが、オーストラリアの WIL では大変重要な要素になっています。WIL が非常に拡大しており、すべての学際にもたがって、多くの学科をカバーしています。拡大したのは、大学の戦略的なミッションに統合しているからです。さまざまな学科に拡大しているので、オーストラリアではさまざまな多岐にわたるモデルが見られます。研究によると、すべての学生にとって WIL は大変豊かな関連性のある教育を提供すると述べられています。

それから、雇用主によって大変大きなサポートを受けています。しかし、大きな資源が必要で、すべての人が関与しなければなりません。残念なことに、現在ではまだ十分な資源が与えられているとは言えません。産業と大学教育との積極的な関与を WIL のために作るため、メカニズムを改善することが必要だとされています。また、平等なアクセスという問題も残っています。私たちの課題であるソーシャルインクルージョンのアジェンダとともに、アクセスと平等の問題はさらに大きくなると思われます。しかし、能力やリーダーシップを構築するための国のアプローチとして、研究に対するサポートが大きくなって

きています。

#32

そして皆さんがオーストラリア、またビクトリア大学のケースでの情報が要る方は、この後、こちらへコンタクトいただけたらと思います。ありがとうございます（拍手）。

（宮川） Judie Kay さんありがとうございました。

質疑応答

（宮川） 今、オーストラリアにおける産学連携教育、職業統合学習の最近のトレンドや課題、ビクトリア大学におけるプログラムの内容についてお話をいただきました。良い機会なので、ご質問があればお受けします。今いろいろなテーマが出てきましたが、どのテーマについてでも結構です。

（Q1） 立命館大学の廣瀬幸弘と申します。評価システムのことについて質問があります。アセスメント（評価）システムを作るのは非常に重要だと思います。そうしないと WIL の効果について十分に研究をすることはできないと思います。ですから、ビクトリア大学での WIL についてのアセスメントシステムについてお話しいただけませんか。

（Kay） 現在それぞれのコースはいろいろなことを評価しますが、それぞれの学問分野において、学生に「自分たちの経験はどうだったか」と質問します。プレイスメントやそのほかの実施実習に加えて、今度はホスト側に WIL に参加してどのような影響があったかを聞きます。ホスト組織に対する調査は、今年行うことになっています。WIL は学生にどのような影響を与えるのかという調査を全国規模で行います。30 の大学を対象として、学生の就業の成果について評価をしようとしています。このようなお答えでよろしいでしょうか。それとも違った答えを求めているらっしゃったのでしょうか。

（Q2） プレゼンテーションをありがとうございます。私が質問したいのは、WIL のコースの評価基準です。

(Kay) それはそれぞれのコースの分野によります。それぞれのコースの中にこうした評価方法を組み込みます。例えば、それぞれがいろいろな研究を試みてジャーナルを書く、あるいはそれぞれの経験について学生がいろいろと報告するというようなこともあります。もちろん、例えばただ単に試験をするなど、適切でない評価もありますが、それはこちらとしてはあまり奨励していません。もっと自分が振り返ってみて、レポートを書いたり、プレゼンテーションを自分の経験に対して行ったりすることが評価の基準として適切ではないかと考えています。

(Q2) 例えばアセスメントをする際のウェブシステムはありますか。

(Kay) いえ、ビクトリア大学では大学全体でのウェブ評価はありません。例えば学生のラーニングシステムの一つとして、ウェブ CT などがあります。または、それぞれ自分の e ポートフォリオという形で行う学部もあります。

(宮川) ご質問をありがとうございました。お話の中にあった評価については、学生の学習のレベルや質についての評価もあるし、企業が提供しているプログラムの評価を学生がするというものもあります。また、そのプログラムの評価を先生がやるという場合もあります。評価というと、今度は大学の中のプログラムがどのように効果的に大学のストラテジーを実行しているか、成果を上げているかというようなものもあります。Work Integrated Learning を大学が実行していく上で、いろいろな角度の評価項目はたくさんあります。それぞれについて、いろいろな方法と項目があるということだというように今のご説明を理解しました。それでは、別のご質問をどうぞ。

(Q3) 文教大学的那須幸雄と申します。ボランティアと WIL、インターンシップの間には、はっきりとした境界がありますか。ビクトリア大学で何か線引きがあるのかどうか教えてください。

(Kay) ボランティア活動というのは助けるというのでしょうか。子どもや少し大変な状態の人を助けたり、食料を提供したり、ほかにも活動があります。東日本は 2011 年に震災

に遭い、津波が起こりました。

(Q3) とにかく線引きがあるのかという質問です。

(Kay) コミュニティで仕事をするのは、実習をするのではないということですね。

(宮川) インターンシップをどのように・・・。

(Q3) あるいはWIL との間の違いを設定していらっしゃるかということです。

(宮川) 違いというのは、大学としてどのようにそれを認定、認識するかという違いでしょうか。学生のボランティアワークと学校がいうインターンシップを大学としてはどのように認識するかという質問です。

(Kay) インターンシップというと、主に利益団体です。この言い方は少し複雑ですね。大学で何か自発的にチャリティなどをやってもらいたいと思いますが、やることに對して単位を取る必要もあります。ですから、WIL、Learning in the Workplace and Community、コミュニティで働くことから学生がメリットを得てほしいのです。また、例えば働く相手である関係会社にもメリットを受けてほしいのです。はっきりとした線引きはありませんが、どちらかという連続体のようなものだと思います。つながっています。これで質問のお答えになりましたか。

(Q3) ありがとうございました。

(Q4) 興味深い話をありがとうございました。福岡女子短大の佐藤です。インターンシップに関して非常に難しいのは、学生とホストとのマッチングではないかと思っています。要するに、学生の希望と職場体験をするホスト側との要望は必ずしも一致していない部分もあるし、学生の希望をそのまま聞くとホスト側に迷惑を掛ける場合もあります。実際に運営をする上で、その辺が難しい問題ではないかと思っています。WIL の中では実際どのようなマッチングのシステムを採用されているのでしょうか。その点を具体的にお話し

ただければと思います。

(Kay) 非常に素晴らしいポイントをご指摘いただいたと思います。学生とホスト側のマッチングが必ずうまくいくわけではありません。両方ともが十分に準備をしなければなりません。つまり、学生が最初に理解しなければならないことは、自分たちの経験が特定のものでなく幅広いものであるということ、そしてホストオーガニゼーションが何を求めているかということです。ですから、学生はこうしたことを合意しなければならないと思います。ホストオーガニゼーションと学生が何を学習するかということを共有しなければならないと思います。

もちろんプレゼンテーションでも申しましたが、例えば学生に対して来週プレイスメントするのであれば、いろいろな違う環境があるかもしれません。最も一般的なスキルが必要かもしれないとしても、今すべてができるかという、すぐにはできないと思います。ですから、いろいろな準備期間が学生にもホスト機関にも必要です。ですから、常に継続的に学生とホストオーガニゼーションに対して連絡を取り合いながら、何か問題があればすぐに解決します。もし解決できなければ、この組織は、次回は WIL に参加しないということなので、相互の利益になるような形でやっていかなければならないと思います。今のお答えでよろしいでしょうか。コミュニケーションと準備、そして耳を傾け、理解することが双方の必要としていることです。やはり双方が合意をしなければならないと思います。ありがとうございました。

(Q4) それはとても分かるのですが、実際にスタートする段階での、学生側とホスト側とのマッチングシステムのようなものは何かあるか。

(宮川) マッチングシステムというのは、機能でしょうか。どのような方法でやっているかということでしょうか。例えば企業情報をどのように学生に渡し、学生の希望を学校がどのように集めて、それをどうやって調整するかという方法のことですか。

(Q4) 方法論です。

(Kay) 分かりました。オーストラリアでは大学によって違うと思います。例えば会社が

どのような機会があるかということを一覧表として出します。そして、これを学生に見せて、自分が何をしたいかを決めてもらいます。これは電子的にやることもあるし、プレースメントオフィスがやることもあります。そして、そうした理解を深めます。時間がたつと、この企業が求めているのはこれなのだということを理解できます。そうすると、何年も経て、学生とホスト組織との間でマッチングを行うことができるようになります。また、大学によってはジョブボードというものがある、それぞれの会社がいろいろな書式を記入します。有償なのか、無償なのか、このぐらいの期間でこのような仕事をする、この会社はこのようなものだということを書きます。学生はそれを見て、関心があるかないかを決めます。大学がマッチングすることもあります。Judie はこれができるので会社をマッチングするということです。大学ごとにいろいろなそれぞれ異なるプロセスがあります。私の大学でも、いろいろな学部やその分野でやり方が違います。

(宮川) 今までも学生と企業とのマッチングの問題はありますよね。例えば有名企業の面白そうな仕事には学生がたくさん応募してしまいます。例えば4~5人しかポジションがないというと、全国から応募してきたらそこに行けない学生もいます。今度は反対に、中小企業で名前も知られていないような企業だと、面白い経験かもしれないが学生は行きたくないというようなことがよく出てきます。そういう問題が起こってくることを前提にして、マッチングの問題を今、課題と考えていらっしゃるのだと思います。オーストラリアでは学生が自由に応募して、学生がそのポジションを得ることはコンペティティブな状態なのか、それともある程度学校が調整するとか・・・。

(Kay) それはケース・バイ・ケースだと思います。例えば会計会社は非常にコンペティティブな形で学生を選びます。また、看護学部の学生であれば、大学が学生に対してオーストラリア以外の病院に行けと決めることもあります。例えばパースになれば、東海岸に行かなければならないというようなことがあります。もちろんプライスウォーターやKPMGなどの大手会計会社にすべての学生が行きたいと思うでしょう。しかし、ここに行くと、非常に大きな会社なので、非常に小さい経験しかできません。しかし、小さな会計会社であれば、より幅広い経験ができるということがあります。

私たちの役割は、学生の意識をもっと広げてより大きな経験をさせることです。つまり、最大手では小さなことしかできないけれども、もっと小さなところであればもっと広い経

験ができます。その場合、これまでやったことをほかの学生に伝えていく。中年の女性が言うよりも学生同士の方がよく話を聞くということもあります。ですから、こうした学生同士の話も一つの方法だと思います。

(宮川) 企業のマッチングに影響してくることとして、事前に学生に対してワークエクスぺリエンスや職業統合学習が何なのかというカリキュラムの意味や、何をやるのかということの説明が必要です。学校側と学生側とで認識がよく合っていないと、単にポジションをどこにするかというところでの問題が大きくなってしまいます。これは私の感想なのですが、学校の悩みの一つではないかと思っています。

残り数分なので最後の質問にしたいのですが、いかがでしょうか。お二人いらっしゃいますので、2分ずつでお願いします。

(Q5) 私は福井大学の坂本憲昭と申します。本当に有益な情報をありがとうございました。たくさんのホスト組織やパートナー組織が WIL にかかわっていると思うのですが、大学は実践家として、どのようにプログラムの目的をすべての関連組織に理解してもらっているのでしょうか。私たちは契約を使っているのですが、そういうことですか。

(Kay) オーストラリアのほとんどの大学にはマーケティング資料があり、ホスト組織に対して説明をします。プログラムの目的を説明して、かかわっていただくことになったら、やり方は違うかもしれませんが、ハンドブックを渡してプログラムが何なのか、役割は何なのかということを説明します。それ以上のことをしなければならぬと思いますが、ホスト組織に対してより良いスーパーバイザーになってほしいということです。情報は十分ではないかもしれないので、ハンドブックのような形で情報を提供し、合意書を結びます。学生の役割、大学の役割、ホスト組織の役割について書かれた何らかの用紙に署名をします。これは協約、合意で、法的拘束力があります。

(Q5) すべてのホスト組織と契約を結ぶということですね。分かりました。ありがとうございます。

(Kay) 私は契約というより合意と呼んでいます。ほとんどの大学はそのような形をと

っていると思います。

(Q6) 今日は素晴らしいお話をありがとうございました。お聞きしたいのは、最後の結論のところで、産業界と大学との関係構築をもっと良くすることが WIL の発展につながるとおっしゃっていますが、現実問題としてビクトリア大学と産業界、ないしは 34 の大学と産業界はどのような関係構築をされていますか。というのは、日本では産学連携と言いますが、産業界は非常に冷たいのです。メリットがあればやるけれども、メリットがないとあまりやらないというのが日本の産業界の現状です。オーストラリアではいかがですか。

(Kay) オーストラリアの調査においては、ホスト組織は WIL からいろいろなメリットを得ています。本当にさまざまなメリットです。まず、大学生が卒業したら明らかに雇うことができますが、それが 1 番ではありません。1 番は、学生のエネルギー、想像力がすごくいいということです。ですからオーストラリアでは、業界が WIL にかかわることでメリットを得るということは既に根付いた感覚です。われわれはいわゆる頂上組織とかかわります。そして、それに対してぜひサポート、提唱していただきたいのです。このようなことを ACEN でやっています。また、オーストラリアの商工会議所、業界グループがすべて WIL を提唱、唱導しているという状態です。

調査において、ベネフィット、メリットはちゃんと示されています。ですから、このようなベネフィットがあるのだということをコミュニティや業界など、組織に対してどんどん知らせなければならないと思います。そして、ホスト組織が私たちとより働きやすくする必要があります。大学というのは非常に複雑なところで、一緒に働こうと思ったら少し難しい存在だと思います。数千万の異なった部門があって、本当に複雑です。ですから、簡単な存在にならなければいけません。先ほどの質問にありましたが、われわれがやっていることは一体何なのかをはっきりさせなければいけません。何が期待されているのか、学生に対してどのような準備活動をしているのか、学生が理解してきちんとした行動をとるのかということすべてをはっきりさせなければいけません。それは難しいことなのですが。これで質問のお答えになったでしょうか。はい、良かったです。

(宮川) ありがとうございました。今日はプレゼンテーションでオーストラリアの状況とビクトリア大学の状況をお聞きしましたが、Q&A のところで日本側はそれぞれ課題、問

題を持っていらっしゃって、オペレーションする上でいろいろな悩みがあります。それをぶつけることによって、今度は Judie さんからもう少し深い情報というか、実際にどうやったら自分の学校でそれを使えるかというような情報が出てくるのです。講演は終わりましたが、この後にレセプションも用意されていますので、ぜひ直接悩みをぶつけて、次のもっと有効な情報を聞き出していきたいと思います。Judie さん本当にありがとうございました。皆さま盛大な拍手をお願いします（拍手）。

（Kay） ありがとうございました。最後に、私たちがオーストラリアでやっていることにご関心があれば、ポストカードがありますが、今年の年末にメルボルンで ACEN の会議がありますので、ぜひご参加ください。もし会議に来られないのであれば、私にご連絡ください。E メールアドレスがありますし、ACEN の Web サイトもありますので、そちらでも情報を得ることができます。そして私にお手伝いできることがあれば、何なりとお申し付けいただければと思います。ご招待いただきありがとうございました。

（司会） どうもありがとうございました。皆さま、コーディネーターの宮川様にもいまい度拍手をお願いします（拍手）。

Work Integrated Learning and Co-operative Education from an International Perspective

Judie Kay

Director: Learning, Work and Career Development, Victoria University

National Director: Australian Collaborative Education Network (ACEN)

Presentation Overview

- Australian Context
- Work – Integrated Learning Overview
- Key challenges facing WIL in Australia
- Comparison between WIL in Australia and other countries
- Elements for a successful WIL program in Australia
- WIL at Victoria University
- Conclusion

Australian Context

- Australian economy continues to be strong and growing
- Competition for talent is expected to increase significantly over next 3 to 5 years
- Employers continue to demand graduates with generic skills
- Expansion of WIL activity is a key mechanism to ensure industry relevant curriculum and graduates with improved employability skills



Work-Integrated Learning(WIL)

*“Work integrated learning as an umbrella term for a range of approaches and strategies that **integrate** theory with the practice of work within a purposefully designed curriculum”*

This report included all types of WIL :

- paid or unpaid,
- credit bearing or not
- compulsory or elective components of courses.

The WIL Report, Patrick et al ,2008

Work-Integrated Learning(WIL)



- Range of terms :
 - Practicum
 - Professional practice
 - Co-operative education
 - Project based learning
 - Industry-based learning
 - Internship
 - Field work
- There is no single consistent definition

WIL Overview

- Substantial growth of WIL in Australia over recent years
- Shift from traditional disciplines to broader range of disciplines
- WIL in Australia is broad with diverse approaches and models
- Integration into the curriculum is a key element of most WIL in Australia
- Government funding guidelines ensures a level of support and academic rigour to WIL in Australia
- Students who do WIL report significantly higher engagement and graduate outcomes than other students
- Increased focus on inclusion of WIL in strategic plans and directions of universities in Australia
- Advocacy and interest in WIL from employer and peak associations is increasing
- Range of interconnected challenges facing WIL in Australia were identified in *The WIL Report*

Challenges: Ensuring worthwhile WIL

Range of challenges identified in provision of worthwhile experiences including availability, quality and student preparedness .

- Creative approaches: simulated, campus based, virtual environments to increase numbers of opportunities
- Focus on enhancing supervision in host organisations
- Enhanced strategies for student preparation including online formats
- Research required to identify authentic, relevant and consistent assessment practices
- Heightened focus on risk assessment and risk management

Challenges: Ensuring equity and access

Inequity of access to WIL for international students, students with a disability, low socio economic backgrounds , indigenous students, students with family responsibilities and students from regional and remote areas

- WIL is an important strategy for not only enhancing graduate skills but ensuring cohorts such as first in family, mature age and lower socio economic backgrounds are engaged with and successful in their studies (AUSSE 2009)
- Evidence of significant barriers to WIL for students particularly financial issues
- Enhanced preparation for WIL
- Increasing utilisation of on campus opportunities, virtual and simulated environments

Challenges: Managing expectations of all the key stakeholders

WIL involves managing complex relationships with stakeholders with divergent expectations and motivations

- Increased discussion and agreement about elements of effective quality WIL including meaningful experience, monitoring , supervision, induction , reflection
- Mechanisms for enhanced dialogue between stakeholders
- Scarcity of placements for some disciplines with concern from professional associations, employers and tertiary institutions
- Some Institutional based professional development for WIL staff
- National Project developing a leadership Framework for WIL

Challenges: Improving communication and coordination

Lack of information, lack of co-ordination and the complexity of contacting tertiary institutions by employers are all barriers to a productive relationships

- Some Tertiary institutions are adopting more sophisticated relationship management approaches
- Central units to support WIL have been established in a number of tertiary institutions to enhance communication and coordination
- The National WIL Portal was launched in May 2011 to facilitate engagement for WIL

Challenges Adequately Resourcing WIL

Resourcing of the complex administrative and academic work involved with WIL is inadequate in tertiary institutions.

- "Delivering WIL is resource intensive " Base Funding Report to the Australian Government 2012
- Recognition that WIL involves a holistic range of activities that go well beyond regular teaching
- Systems to streamline the management of WIL are being implemented
- WIL is resource intensive also for employers : little research into this area
- Examining and managing workloads for both academic and administrative staff

Comparison of WIL Models

- Co-operative education is the more traditional WIL model in North America compared to Australia where co-operative education is one model amongst a range of diverse WIL models
- Co-operative education with alternating periods of employment is rare in Australia whereas the sandwich model for paid WIL placements is more common
- In Australia the WIL experience is more likely to be integrated into the students learning and be credit bearing than in North America
- There is a stronger corporate tradition of supporting paid placements by industry through co-operative education in North America
- Unpaid internships are common in the USA but are generally not integrated into the students curriculum
- Unpaid internships, unless they are undertaken in a not for profit organisations and are linked to students study problem are problematic under the Fair Work Australia legislation.

Comparison of WIL Models

- WIL has academic credibility in Australia whereas this continues to present a challenge for co-operative education programs in North America
- Many co-operative education programs are run by central units and not in discipline areas in North America whereas WIL is managed by discipline areas in Australia
- WIL in Australia is more explicitly linked to universities strategic missions often including the aim of providing all students with some form of WIL resulting in involvement of large numbers of students
- There is a strong tradition of service learning in North America which is more likely managed at a faculty/ discipline level and be linked to students learning
- Service learning or community base learning is currently gaining greater prominence in Australia

Elements of successful WIL programs:

Institutional

- a clearly articulated, shared vision of WIL within the university including its purposes and expectations
- a realistic recognition of WIL in institutional systems and infrastructure together with the provision of adequate resources
- recognition of the distinctive and complementary roles the university and workplace have in shaping and supporting the learning
- engaging and utilising existing institutionally-provided enabling services such as careers services in the WIL process.

Good Practice Report : Work – Integrated Learning, Prof. Janice Orrell 2011

Elements of successful WIL programs:

Educational

- adequate induction and preparation of students prior to their practice-based experiences
- providing structured, critically reflective, self and peer learning processes during and after WIL experiences
- presence of an element of risk to contribute to profound learning for students
- investing in the development, trialling and up-scaling of technology-based tools to provide alternative or supplementary WIL experiences

Good Practice Report : Work – Integrated Learning Prof. Janice Orrell 2011

Elements of successful WIL programs:

Partnerships

- ensuring supervisors are familiar with students' prior university learning
- identifying and including all stakeholders in development, innovation and communication regarding WIL
- induction/professional development for university and host-organisation supervisors and development of their leadership capabilities
- robust and mature relationships with placement providers (host organisations) underpinned by a commitment to mutual benefit

Good Practice Report : Work – Integrated Learning Prof. Janice Orrell , 2011